

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520105

研究課題名(和文)近代日本と中国における「哲学」概念の成立過程の比較研究

研究課題名(英文)Comparative Study on the Concept of "Tetsugaku/Zhexue (Philosophy)" in Modern Japan and China

研究代表者

高柳 信夫 (TAKAYANAGI, Nobuo)

学習院大学・付置研究所・教授

研究者番号：80255265

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)：本研究における比較分析を通じて、近代日本・中国の「哲学」成立期の特徴について、主に以下の点が明らかにされた。明治維新前後の時期を除き、近代日本の初期の「哲学」は形而上学をベースとしたドイツ系哲学が主流であり、中国やインドなどの「東洋哲学」の思想史分析においても、その学問分類の枠組を「所与」のものとして当てはめて叙述する傾向が強い。それに対して、近代中国の場合、西洋思想導入当初より、進化論が圧倒的な影響力を持つとともに、「哲学」的な機能を果たしたために、「形而上学」への関心は薄かった。さらに、「知識」を重視する西洋の「哲学」と中国の知的伝統との異質性を指摘する議論も少なくない。

研究成果の概要(英文)：By a comparative analysis in this study, the following aspects have been clarified about characteristics of establishment period of "Tetsugaku/Zhexue (Philosophy)" in modern Japan and China. The mainstream of "Tetsugaku (Philosophy)" at early stage of modern Japan, except for the period before and after the Meiji Restoration, was German philosophy based on metaphysics. It showed a strong trend to describe analyses of history of thoughts on "Toyo Tetsugaku (Oriental philosophy including China and India)" by applying the framework of their academic classification as given. In contrast, "Zhexue (Philosophy)" in modern China had less interest in "metaphysics" because evolution theory had overwhelming impacts with its "philosophical" function since the beginning of introduction of Western thought. In addition, there are quite a lot of discussions that suggest some heterogeneity between Western "Zhexue (Philosophy)" focusing on "intelligence" and the tradition of Chinese thought.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 思想史

キーワード：日本哲学 西洋哲学 中国哲学 東洋哲学 形而上学 進化論

1. 研究開始当初の背景

近年、日本や中国の歴史研究においては、一国の範囲に着目するのみでは限界があり、東アジア地域を一つのまとまりを持った圏域として、その相互関係に留意して研究を進めるべきであるとの見方が一種の「常識」化しつつある。思想史研究の領域においても同様の認識が共有されつつあり、特に、19世紀後半から20世紀初頭という、今日の日本や中国における知的営為の基本となる多くの「近代の語彙・概念」が成立した時期について、日本と中国（さらには朝鮮）の間の影響関係に着目した研究が少なからず蓄積されてきている。

しかしながら、こうした諸研究は、現時点では「語彙」レベルのものが多くを占め、「概念」についても、その「受容史（特に日本から中国への）」に重点が置かれていることから、了解されるように、事実関係の解明を主眼とする研究が中心であり、未だに概念の内容についての比較研究的視点に立つものは少ない。

そこで、今回、こうした研究状況を踏まえて、“philosophy”の翻訳概念である「哲学」について、日本と中国の思想界でそれが定着しはじめる初期段階において、両国の知識人たちが「哲学」をどのようなものとして受け止めたかについての比較研究を計画するに至った。

2. 研究の目的

そもそも、“philosophy”は極めて「西洋的」な知のあり方であるが、それは近代日本および中国のそれぞれにおいて一応「哲学」として受容された。しかし、“philosophy”が「哲学」へと変換される過程において、各々の地域の知的環境の影響によって、「哲学」にはそれぞれ独自の意味付けがなされたはずである。（それゆえ、今日においても、本来の“philosophy”を重視する立場からは、日本や中国においてそもそも「哲学」なるものが成り立つのかという問いが常に提起されている。たとえば、2001年から中国で起った「中国哲学の合法性」問題をめぐる論争などはその一例である。）

そこで、本研究では、日本および中国における「哲学」の特質を明らかにするために、以下の2点を目的とする。

第一の目的は、日本および中国において、「哲学」がどのような知的営為として受け止められたかという点を明らかにすることである。即ち、西洋からの外来の学術である「哲学」について、日本や中国の知識人たちが、その特徴をどのように把握していたか、について検討を行う。

第二の目的は、両国において、日本および中国の過去の知的遺産（あるいはより広く東洋の知的遺産）について、それが「哲学」と

いかなる関係にあると意識されていたかを明らかにすることである。具体的には、そこに「哲学」と同質的なものを見いだしていたのか、それとも異質な学術的伝統を見いだしていたのか、といった点を、哲学史（思想史・学術史）等の歴史叙述に即して検討する。

3. 研究の方法

本研究は、方法論の面ではあえて奇を衒わず、文献の丹念な読解を中心とした、オーソドックスな思想史研究の手法を用いる。この研究において参照すべき文献は、日本・中国の近代思想に関連するもののみならず、同時期の西洋の「哲学」に関わるものをも含む広範囲に及ぶため、文献資料の収集自体も一つの大きな課題となるが、近年急速に整備されているウェブ上のデジタルデータも十分に活用するものとする。

今回の研究における研究対象は、時期的には、主として「哲学」導入期から、近代的大学教育を受けた最初の世代が活躍するまでとする。また中心として取り上げる人物はそれぞれの時期のメインストリームとなる知的な流れに直接的な影響力のあった人物を主とする。例えば、日本では西周、井上哲次郎、井上円了など、中国では、嚴復、梁啟超、胡適などである。もちろん、彼ら以外にも優れた思想家は数多く存在し、本研究においても、中村正直、中江兆民、加藤弘之、章炳麟、王国維らについてはその発言を随時参照したが、限られた期間内での研究において、その内容が拡散してしまうことを避けるため、当時の知識人世界の平均的な考え方に近いものを描出することを主眼とした。

4. 研究成果

「Philosophy」の訳語として最初に「哲学」という言葉を創り、日本で初めて本格的に哲学を導入した西周（1829～97）は、西洋の学問と儒学等の間に共通の内容が含まれることを認めつつも、両者の間に質的な相違を見いだしていた。彼にとって、西洋の学問と儒学等の東洋の学問の決定的差異は、それが個別的知識の集合ではなく、自然科学から社会科学まで、全体が一つの体系を構成している点にあり、さらに、その体系の統一性を支えているのが「哲学」（狭義でいえば、論理学等の方法論）であった。西のこの学問観はコント流の実証主義の系譜に連なるものであり、日本における最初期の「哲学」は、一時、英米流の経験主義的な流れが優勢であった。

1877年に東京大学が設立されると、その当初より「哲学」の科目が設置され、学問分野としての「哲学」は、日本における正統性を早期に獲得した。その後、アカデミズムにおける教育内容の影響もあり、1880年代の後半以降、日本の「哲学」の主流はドイツ系の観念論へと移る。それに並行して、「哲学」

は、一般的には「理学」を除いた論理・心理・倫理等の諸学を指し、そうした諸学に「統一の観」を与える狭義の「哲学」の役割は形而上学が担うものとされ、形而上学には「純正哲学」の名称が与えられた（井上円了（1858～1819）『哲学要領』（1886～7）等参照）。そして、このような、形而上学を基礎とする「観念論」的な体系こそが「哲学」であるという見方は、その後長い期間、日本における「正統的」な「哲学」観となっていく。

「東洋哲学（中国・インド哲学）」については、井上円了は、西洋の学者が提唱する「倫理、心理、論理等の哲学および純正哲学」は、東洋の学者もすでに論じているが、全体の「詳密さ」「完全さ」において西洋に劣っているとする（『哲学要領』）。この場合、東洋の中にも「哲学」が発見されていることになるが、同時にそれは「倫理、心理、論理等の哲学および純正哲学」という分類枠組みを所与のものとして当然視した上で、東洋の思想的遺産をその枠組みに沿って再編成することをも意味している。井上円了の場合、その上で、東洋哲学の中に見られる個別的に優れた点を抽出し、東西哲学を融合して新たな「哲学」を構築する、ということが目標とされてゆくこととなる。

井上哲次郎（1856～1944）の儒学研究も、西洋哲学の枠組みに基づいて日本の儒学者の所説を再構成するという点においては同様であり、彼の『日本陽明学派之哲学』（1900）、『日本古学派之哲学』（1902）、『日本朱子学派之哲学』（1905）では、いずれも形而上学を根本とした「西洋哲学」の構成枠組みを前提とした上で、分析が進められる。ただ、そのために、形而上学的考察を含む宋明理学は孔孟の学よりも発展した学問であり、古学派の朱子学等への批判は当たらない、等の独自の見解も披瀝されている。さらに、これらの井上哲次郎の儒学研究の場合、「日本独自の哲学」と称しうるものを見いだすまでには至っていないものの、それぞれの思想家に通底する「日本の精神（例えば「活動主義」）」を抽出するという側面もあり、多角的に分析する必要がある。

いずれにしても、日本の場合、本研究の対象とする範囲においては、日本（もしくは東洋）における過去の思想遺産の中に「哲学」と同質的な内容を見いだす場合でも、「哲学」の欠如を指摘する場合でも、ともに、「哲学」こそがあらゆる学問の根本であり、普遍性をもつものであるという前提は共有されており、こうした見方を相対化する視点は見られない。この点は、井上哲次郎、井上円了らと哲学上の立場において対極的な、ラディカルな唯物論者であった中江兆民（1847～1901）の場合も同様である。彼は、「我日本古より今に至る迄哲学無し」（『一年有半』（1901））として、日本における「哲学」の欠如を指摘しているが、これは単に事実を示したものでなく、「哲学無き人民は、何事を為すも深

遠の意無くして、浅薄を免れず」とあるように、日本における「哲学」の必要性を強調したものであり、中江も根本の学としての「哲学」の重要性を全く疑っていない（但し、「哲学」の具体的含意についてはさらに検討を要する）。

一方、近代中国において、キリスト教以外の「西洋哲学」と呼ぶにふさわしい書として最初に世に出されたのは、1898年に正式に出版された厳復（1854～1921）の『天演論』（T.H.Huxley（1825～95）*Evolution and Ethics*（1893）、*Prolegomena*（1894）の訳書）である。本書の本文および長大なコメントを通じ、厳復は生物進化論の他、H.スペンサー（1820～1903）の「進化哲学」を紹介した。

厳復も西周同様、西洋と中国の学問の差異は全体的体系性の有無にあると理解し、西洋の体系的学問の基礎には、論理学と実験・観察に基づく厳密な科学的方法論があると見なした。それゆえ、厳復にとって、スペンサーの『綜合哲学体系』は、科学的方法によって天文地理・生物・心理・社会・倫理の諸領域を統合した空前の学問体系であった。

その後、約20年近く、中国の思想界では進化論が宇宙を貫徹する普遍的理論として圧倒的な影響力を持ち続けたため、直接進化論を「哲学」と呼ぶことはさほど多くは無いにしても、諸学の根本となる理論（当時の用語を用いれば「公理」）として、日本における「哲学」と類似した機能を果たしていたと思われる。

また、スペンサーなどの進化論者の多くは「不可知論」の立場から、形而上学の対象となる諸問題は「不可知」であるとして、積極的には論じない姿勢をとったこともあり、中国では形而上学への関心は日本よりかなり薄かった（厳復は、形而上学について論ずることは実用上無益であるとして冷淡な態度をとった）。これは、日本では、ラディカルな進化論の立場に立つ加藤弘之（1836～1916）に対して、井上円了（『破唯物論』（1898））、井上哲次郎（「哲学より見たる進化論」（1910））らが、進化論は形而上学的基礎を欠いているとして批判を行ったのとは対照的である。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、中国の知識人に最も大きな思想的影響を与えた人物である梁啓超（1873～1929）も、この時期には、進化論をベースにして言論活動を展開した。それとともに、彼自身は「哲学」という語を比較的頻繁に使用しているが、特に「諸学の学」といったような特別な意味を与えてはいない。例えば、「論中国學術思想變遷之大勢」（1902）では、「哲学」は「哲学思想」として「政治思想」などと並列されており、単に「（形而上学までを含んだ）抽象的學術」を指す程度の意味でのみ用いられている。

仏教に対して親近感を持つ梁啓超は、形而

上学に対しては厳復ほど冷淡ではないが、当時の「亡国滅種」が差し迫った危機として意識されていた中国の状況下では、純粋な知的営為としての「哲学」には、重きを置いていなかった。例えば、「論宗教家与哲学家之長短得失」（1902）の中で「唯心派哲学」が高く評価されているが、それは理論的な点においてではなく、宗教同様の情熱をもって人を行動に駆り立てるという機能に着目してのことである。

20世紀に入ると、清朝政府も近代的な学制の確立を目指して種々の改革が行うが、その中で、高等教育における「哲学」の扱いが問題となった。当時の清朝政府の最も有力な官僚の一人であった張之洞（1837～1909）は、「哲学」は西洋に限定された独自の学問で、抽象的な議論をもてあそぶのみで実際の役に立たず、学生の軽佻浮薄な風潮を助長する有害な学であるとして、高等教育機関において「哲学」を講ずべきでないと主張した。この主張の背景には、当時、反政府的なグループ（梁啓超もここに含まれる）の雑誌等において、「哲学」が一種「モダン」な言葉として屢々用いられていたということもある。

張之洞のこうした見解に対しては、王国維（1877～1927）らが、「哲学」は決して有害なものではなく、むしろ有益な学問であり、また、儒学の中にはすでに「哲学」と共通する内容があるなどと主張して反論したが、結局、「哲学」は清朝の学校システムの中で公認されぬままに終わった。中国において「哲学」が高等教育の中に正式に編入されたのは、中華民国成立後の1914年の北京大学哲学門の設置からである。

本格的な「中国哲学」の通史的著述は、中国人よりも日本人の方が先んじていた。遠藤隆吉『支那哲学史』（1900）などが初期の代表的なもので、遠藤はその序文の中で、綿密な思考が苦手な中国人、中国語文献の読解力に問題のある欧米人のどちらも、適切な「中国哲学史」を著す能力を持っておらず、両方の能力を兼ね備えた日本人のみがその任に当たることはできるとの自負をもってこの書を著したとしている。

その後、日本人による「中国哲学史」は複数著されたが、中国人自身による中国哲学の通史は、教育システムにおける「哲学」の導入の後れもあって、その出現はかなり遅く、1916年の謝無量（1884～1964）『中国哲学史』（1916）が最初であった。ただ、本書は、日本の諸作に比して、新たな論点はさほど多くない。

中国人の手になる『中国哲学史』の著作として、その斬新さから大きな反響を呼んだのが、胡適（1891～1962）の『中国哲学史大綱（上）』（1919）である。この書は、各思想家の学説の列挙という形をとらず、思想家の「Logic」に着目し、各思想家・学派の「知識論」を中心に歴史叙述を行い、従来の中国古代思想のイメージを一新した。

胡適は、アメリカで J. デューイ（1869～1952）に学び、プラグマティズム（胡適の訳語では「実験主義」）に心酔しており、彼が哲学史叙述において「知識論」に注目したのも、現実世界についての「知」こそが「哲学」の核心だという自身の哲学的立場の反映であった。同時に、本書の特異な叙述スタイルは、「知識論」の範囲に入らない中国の過去の思想家たちの営為は「哲学史」として記述するに値しないという胡適の判断をも示すものである。

こうした胡適の中国哲学史叙述に対して、梁啓超は、「評胡適之『中国哲学史大綱』」（1922）において、確かに、胡適の研究は、中国古代哲学の「知識論」に関する面において空前の成果をあげたことは間違いないが、そもそも中国古代哲学を「知識論」という観点から分析することが妥当かどうか、という疑問を呈した。

さらに梁啓超は、『儒家哲学』（1927）において、「愛知」を原義とする philosophy の訳語である「哲学」を儒家思想に対して用いるのは厳密に言えば適切ではないとする（梁啓超は、すでに「哲学」の語が広く流布しているために、仕方なくこの語を用いるが、儒家思想については本来「道学」「道術」という語を用いる方が適切だとする）。その上で、世界の「哲学」（但しここでは philosophy より広い意味で使用されている）には、「人と神との関係」を重視するユダヤやインドの哲学、「人と物との関係」を重視する古代ギリシアと現代欧州の哲学、「人と人との関係」を重視する中国の哲学の三種があり、儒家の思想の本領は、古代ギリシア・現代ヨーロッパ流の「philosophy としての哲学」とは別のところにあるとして、「（philosophy の翻訳概念としての）哲学」を相対化した。

ただし、こうした梁啓超の見解は、先の胡適の見方と価値判断の点では異なるものの、過去の中国思想の多くの部分は「哲学（philosophy）」の枠に収まらないという事実判断においては一致しているということについては注意を要する。

さらに、胡適にも学んだ傅斯年（1896～1950）のように、世界の中で、哲学で著名な民族は、インドのアーリア人、ギリシア人、ドイツ人しか存在しないということに着目し、結局「哲学」とは印欧語族の煩瑣な言語の病的な副産物でしかないと指摘し（『戦国子家講義』（手稿））、さらに「哲学」の価値を相対化する見解を示す者も存在した。

以上、本研究において得られた主要な知見を列挙してきたが、これらのうち、一部の個別的事実についてはすでに先行研究において指摘されているものもある。ただ、本研究では、それを日中の比較研究という視点から改めて見直すことによって、それぞれの事実が持つ特質が新たな形で定位されており、その点に本研究の主要な意義があるといえる。

現時点までに公表・提出されている論文等は、本研究から得られた部分的成果を文章化したものであるが、さらに、本研究の総論的研究として、日中の「哲学」観、哲学史叙述の比較研究についての論文を順次公表してゆく。

また、今後、本研究で得られた知見を一層発展させるために、日中における「哲学」の様相についての比較研究という視点を維持しつつ、研究対象とする人物や時期の範囲を拡大して研究を継続してゆく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

高柳信夫、ス賓塞与嚴復：兼論ス賓塞思想在日本和中国的命運、道家文化研究、査読無、第28輯、2014、印刷中

〔学会発表〕(計1件)

高柳信夫、ス賓塞与嚴復：兼論ス賓塞思想在日本和中国的命運、「嚴復：中国与世界」国際学術会議(北京大学哲学系主催)、2013年10月12日、北京大学

〔図書〕(計1件)

高柳信夫、京都大学人文科学研究所、近代東アジアにおける翻訳概念の展開、2013、55～81

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高柳 信夫 (TAKAYANAGI, Nobuo)
学習院大学 付置研究所 教授
研究者番号：80255265

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：